

中国古代の哲学者老子は、紀元前四八〇年から三八〇年頃の人らしい。かれの著書はこの八一章から成る散文と詩文の一冊だけであるが、これはかれが中国を去って西の方へ帰らぬ旅途に、く時、函谷関の関令尹喜という人の求めに応じて書き残したものと伝えられる。後人がそれを編集して、上篇と下篇に分け、上篇は第一章から第三十七章まで、下篇は第三十八章から第八十一章で終わる。第一章は「道」の字から始まり、下篇は「徳」の字が巻頭にあるので、「道德経」とも名づけた。用字は五千三百二十八字から成る。

筆記の際の誤伝もあって、幾種かの異本が出ているが、みな大差はない。しかし、中国語は原来文法が不正確で語根と助辞から成る孤立語であって、特に古文は難解とされている。二千幾百年時勢の変化のため解釈がまちまちだが、老子の主張した「無為にして自然の道に同化する」ことが宇宙と人生の極致であるという精神は文化に寄与するところが大きい。

古来老子を訳註したものは多いが、多くは第一章の冒頭から誤訳誤解されている。わが師井上秀天はその著「老子の新研究」によって多くの異本を対照し、なおゼームス・レックとライオネル・ジュールスとウォルター・ゴルドン・オールド等三人の英訳とから自からの英訳と対比して誤訳を指摘した。

本書エスペラント訳者は井上秀天氏と旧交あり、神戸のお宅へ訪問して教えを受けたもので、その見解を最も正しいものと信じて、それを基本として用いた。毎章の終りに訳者の見解から註

を加えた。これはすでに三回目の改訳であるが、まだ満足できない点が多いことを付記する。

一九五七年秋

老子と道教

中国語の発音はローマ字で表す方式として古くから字引が出ているが、トーマス・F・ウェーデルの「語音自述集」(日本語版は「支那声音字彙」東京文求堂発行)によった。そしてエスペラントの正字法によって書き改めた。

老子(Lao-tzu)を(Lao-tse)とした。老いたる先生という敬称であり、老師匠の意であるが、中国の歴史に老子の名が出た記事は僅かよりなく、彼の姓は李、名はタヌ、李輔・タヌ又は李耳(リ・アル)と呼ばれた。何か耳に特徴があったらしく老耳(ラオ・アル)とも字名された。生年月日は不明だが、出生地については漢の司馬遷の「史記」に、楚の国苦県、癘郷、曲仁里の人とある。こんな不吉な地名が実在したとは思われない。かれがどこかの翰林院(図書館)の役員をしていた記事もある。中国の史家の意見では周の烈王から顕王の初年までの数十年間(西紀前三八〇年〜四八〇年間の数十年間)の人と思われる。よって、今から二千三百年から二千四百年前の人とみられる。孔子(前五五〜四七九)が年表によると紀前五二二年(周の靈王の二十年)十二月、孔子礼を老子に問うとあり、その時孔子は辞して「老子は龍なり」と私語したとあるが、

疑問だ。実際は孔子よりも後代で、孟子（紀前三七一〜三〇六）より以前のことにらしい。

道教（*Tao-ism*）は老子の死後創められた宗教で、複雑な内容をもつ。老子、荘子、列子等の説に中国の民族思潮を織りませ、仏教の陰者の生活や神仙術、陰陽学、星占術、医術等も加えて神秘宗教に仕上げたのは西紀一二六〇〜一四四〇年頃後漢時代に「天師」の称号を与えられた江西省龍虎山に廟を建てた張道陵とその一族と弟子らが勢力を張り、仏教にならって「道臈」という三百五十巻の大冊を出して、禪の修業に似た調息法、静座を修業し、葬祭の儀式を行って、民衆の間に根をおろした。道教は老子と直接には何の関係もなく、本書に一貫した通り国家と道徳と称する悪風に強く反対した人である。

老子ノノート

Lao-Cu（ラオ・ツ）の氏は李、名は耳（アル）又はタンで、通称ラオ・アルまたはラオ・タン、ペンネームは伯陽（パイ・ヤン）と呼ばれたが、生国の義は甚だ心もとなく、楚（チュ）の国は瘠郷（リ・シアン）の曲仁里（チュイ・ジュヌ・リ）と申し、地図なんかにはないまるでフィクティブな所で、こんな悪名をつけたのは、漢の司馬遷が「史記」の中にチョッピリいたずらに書こんだものである。■老子が死んだ時に（実は老子は函谷関を西へ去って行方不明）会葬した群衆が泣きわめく中を一人の弟子がすました面であって来て、アッサリ軽礼して立ち去ろうとした

のを見て、無礼を咎めたら、「老子はその思想で民を感化することができず、泣く者が多いからこれくらいで沢山だ」といった。■山東の泰山の上に老子の碑があって、石川三四郎さんが見に行ったそうだが、それは只の自然石で何も字は彫っていない長い石だそうだから、老子のお気に入ったのだろう。■孔子が老子と会見したとき（実は老子は孔子が死んでから生まれたからウソとわかっているが）孔子は出て「老子は龍だ」と云ったと古記録にあるそうだ。■中国の道教では老子を「太上老君」と称してあがめ迷信のたねにした。■ある人は「老子」一巻の中には散文の章もあり、詩の韻をふんだ章もあり、韻のない箇所は後人の偽作だろうと云う。■またある人は老子は中国生まれではなく、中央アジアの月氏国の人らしいからエホヴァという三音をかくして書いた（十四章参照）、そして関を出て西へ故郷に帰ったのだと云う。中国で「老子」を注解した本がたくさん出たし、書写中の誤記で異本も多いが、古注の中で最も信憑されるのは魏（西紀二一六〜二六四）に出た王弼（ワン・ピ）作の「老子道徳経」諸本注釈と「河上公注」の二冊である。■その他傳奕（チュアヌ・イ）の注、開元（カイ・ユアヌ）本というのが唐代に玄宗（スワヌ・ツング）帝が出した。蘇微（ス・ウエイ）が宋（スン）時代出したもの、もう一つ宋代に林希逸（リン・シ・イ）が「老子廬齋口義（ラオ・ツ・コ・チ・カオ・イ）」を書き、元代に異澄（イ・テン）が「道徳真経注（タオ・テ・チュヌ・チン・チュ）」を出し、明代には焦始（チャオ・シ）が「老子翼（ラオ・ツ・イ）」を出し、清代には姚弼（ティアオ・ティン）が「老子章義（ラオ・ツ・チャン・イ）」と軍沃（ピ・アウヌ）が「道徳経故異（タオ・テ・チン・カオ・イ）」を出した。人民中国になってからも馬叙倫（マ・ス・ルヌ）の「老子覆詰（ラオ・

ツ・フ・チ)と王重民(ウァン・チュン・ミン)の「老子考(ラオ・ツ・カオ)」と揚樹達(ヤン・シュ・タ)の「老子古義(ラオ・ツ・ク・イ)」が出た。日本では漢学者の老子研究の産物として、下の諸本が出た。太宰純「老子特解」。金蘭齋「老子経字解」。海保皋鶴「老子国字解」。戸崎明充「老子正訓字問義」。重野葆光「老子解」。葛西質「老子幅注」。大竹鷲「老子古解」。皆川愿「老子釈解」広瀬建「老子摘解」。太田敦「老子全解」(以上は明治時代以前のもの)■活版になってから出たものは多数で枚挙できないが、主なものは、伊福部隆彦、小林一郎、服部宇之吉、井沢弘、山本潤雲、長谷川如是閑、武内義雄、井上秀天(本書原本「老子の新研究」)高須芳次郎、岡田道一、大西雅雄等がある。■老子の後継に荘子と列子がいる。「荘子」は西紀三七一―三〇四年の人、その著は三三卷(内篇七遍、外篇十五篇)あり、郭象(クオ・シアン)の注あり。のちに「南華経」と名づけられた。文は短文が多く、逆説奇説で有名、万有神思想、一元論等老子に似ている。列子は西紀四〇〇年頃の人でその著「冲虚真経」(チン・ス・チュヌ・チン)八巻がある。かれは函谷関で老子から直伝を受けた尹喜から学んだという。老子の説を敷衍して宿命論を主張した。■竹林の七賢人と云われる漢の後代の反逆者らが作った「菜根譚(ツァイ・ケン・タヌ)」一冊は西紀一六六年代に大検挙を脱して山林に集り「清談」と称して五五〇篇を書き、主として老子と荘子を話題とした詩文である。日本では老子の説が無政府主義であることをかくして「中国思想の理想は王あるも無きが如し」と曲論してきたのが事実である。老子に科学的論拠を与えて東西の思想のかけ橋としたものがアナキズムである。■創作「老子」が大泉黒石氏の老子研究の産物として大正一一年春秋社から出た。同時に「老子とそ

の弟子」が同じく春秋文庫から出ている。著者はロシア人の血をうけた人ときくが、美しく老子の思想をつかみ実践的に面白く表現している。

死なないうちに書いておく

一九六一年十二月十七日、脳出血が突発して倒れたが、軽かったらしく小林医師に治療をうけ、順天堂の解剖教授椿宏治先生が来て養生法を教えてくれたりしたおかげで、一九六二年三月末には大分よくなって、右手は字が書けるようになったので、いづれ再発する第二回出血まで、もし稼げるかもしれないと思って、今一冊だけ書いてあったこの「世界語老子」をもう一冊校正しながら書き始めた。一九六二年五月十三日に書き終わった。

ヴェネズエラの旧友グラシアの方へはタイプで打ったのが一冊送ってあるので、それをもとにスペイン語に反訳がすでに終わって、メキシコで出版する準備中だそうだ。又、それによって英訳もする準備中であり、エスペラントでこのまま出版する計画もグラシア君が引きうけている。エスペラント文を抜いた和訳と原漢文(*)だけのものは書名を「老子直解」と名づけたい。

一九六二年夏

(*)この版では、原漢文は割愛されています。

第一章 道可道非常道

道のいう可きは常道に非ず、(道は宇宙の本体。常道は生から死への道) 名の名づく可きは常名に非ず、(常名は宇宙のはたらき) 無は天地のはじめと名づくべく、有は万物の母と名づくべきなり。故に常無にしてその妙をみると欲し、(妙は道の真髄、本源) 常有にしてその徼(きょう)をみると欲せよ。(徼は万物の出る極、物事の境) この両者は同じきも出でては名を異にするなり。 同なるこれを玄というも、(玄は熱達者、過去完了の巨匠) 玄のまた玄にして衆妙の門なり。(衆妙の門は微妙の出所、総ての現象)

〔訳者註〕

本文冒頭が強い否定で始まる。華語のタオ(道)は倫理の道、良風美俗の原則を意味するが、老子によればそれは宇宙の真理であり、自然の極致であり、または万物の母である。万物は道から与えられた性格によって運営しているのである。玄の字は老子の主張を代表する「黒い」とか「神秘」を形容する字である。

第二章 天下皆知

天下はみな美はこれ美たることを知るもこれ悪なるのみ 善はこれ善たることをみな知るもこれ不善なるのみ 故に有無は相生じ、難易は相成り、 長短は相あらわれ、高下は相傾き、 音声は相和し、前後は相したがうなり。 (聖人は老子の理想の完全な個人。無為は人為策略のないこと) これを以て聖人は無為の事におり、 (功績が去らない) 不言の教えをおこなう。(天地の無言の示唆)

万物はおこるも辞せず、生ずるも有せず、(物が罷業せず、生産するが私有しない) なすもたのまず、功なるもおらず。 それただ居らず、是を以て去らざるなり。(功績が去らない)

〔訳者註〕

この章は修業する者と無覚悟の俗人との間の生活の相関的比較を示す。それは宇宙が ストライキなしに作用して、万物を生産するが私有はしないことを無限の尺度で計って、 道にもとづいた内面生活を宣言したものである。

第三章 不尚賢

賢をたつとばざれば民をして争わざらしめ、えがたきのためをたつとばざれば民をして盗ならざらしめ、欲すべきをみせざれば心をして乱れざらしむるなり。これを以て聖人のおさむるや、その心を虚にし、その腹を實（じつ）にし、その志を弱にし、その骨を強にし、常に民をして知なく、欲なからしめ、かの智者をしてあえてなさざらしむるなり。無為をなさばすなわち、おさまらざるなし。（無為をなすとは、不自然な人為をしないことを実行する）

〔訳者註〕

無為の治世の実行の具体的指教である。

第四章 道冲而用之

道は冲（ちゅう）にしてこれを用うるも或はみたず、（道冲は一切皆空）
淵乎（えんこ）として万物の宗に似たり。（淵乎は、そこ知れず深い。宗は源泉）
その鋭（えい）をくじき、その紛（ふん）を解き（そのは道をさす）
その光をやわらげ、その塵に同じうし、
湛乎（たんこ）として或は存するに似たり。（和光同塵は老子の名句で自分の才能の光をやわらげてかくし、ごみのような俗人とへだてをなくする）
われは誰の子たるをしらず、（われとは道みずから）
帝の先（さき）に象（に）たり。（帝は造物主。先にたりは、それ以前からのようだ）

〔訳者註〕

造物主なるものは人間が後天的に造ったものである。「その光をやわらげ、その塵に同じうし」とは老子の名句で、倫理の金言であるが、奴隸的屈従をしないこと（五十六章参照）、言いかえると、自分の徳の光をやわらげて、世俗の中に居てめだたないように同化して道をたもつ謙遜自尊の教えである。道は人間の作った宗教の神よりも以前からあったものだ。

第五章 天下不仁

天地は万物を以て蜀狗（すうく）となす程に不仁ならんや。（蜀狗は、わら人形）（術者も加え、聖人は百姓（人民）を以て蜀狗（すうく）となす程不仁ならんや。天師の秘号を与えられた江西天地の間はそれなお、たくやくのごときか、（たくやくはふりご）虚にして屈せず動はしからばよいよ出ず。（屈せずは、やめない）多言ならばしばしば窮す。中を守るにしかず。（中立、本体の道を守る方がよい）

〔訳者註〕

人間に自然の真理を示す皮肉な反意語である。同時に人間生活の態度に警告したものである。

第六章 谷神不死

谷神（こくしん）は死せず、これを玄牝（げんぴ）という。（谷神は山彦。玄牝は万物の母、女性の表徴）
玄牝の門は是を天地の根という。（玄牝の門は女根）

綿々として存するがごとくにして、これを用うるもつかれず。（天地の作用は人間のように疲れない）

〔訳者註〕

道の表徴を谷の形で女性と見て、無限の生殖の受け継ぎを自然がうみつかることのない状態を示す。

第七章 天長地久

天は長く地は久し
天地のよく長くかつ久しき所以（ゆえん）のものは、（所以は、わけ）
そのみずから生ぜざるを以てなり。故に長生きす。
これを以て聖人はその身を後にするも、しかも身は先だち
その身をそとにするも、しかも身の存するはその無私なるを以てにあらざや。
故によくその私をなすなり。（私は自分の個性）

〔訳者註〕

長寿の法として伝えられるように乗車するよりも歩け、肉を食うよりも時をおくらせ

て食べよといわれる通り、無我によって自然と調和せよとの教えである。

第八章 上善若水

上善は水のごとし、水はよく万物を利して争わず、（上善は聖人）

衆人のにくむ所に處する、故に道に幾（ちか）し、（幾は近し）

居は善地、心は善淵、くみすれば善仁、（善淵は深いふち。くみすれば善仁は聖人の与えるものに与すれば博愛仁慈となる）

言えは善信、まつりごとは善治、

事は善能、動けば善時なり、

それただ争わず、故にとが無し。

〔訳者註〕

聖人の態度は最上の善であって、その特性は水の如くである。政治について孔子は論語の中に、政は「民をして知らしむべからず、依らしむべし」と書いた一行のためにイソップ物語の犬のように、すべての信用を失った。

第九章 持而盈之

持してこれをみたさんよりは、そのやむにしかず、（手に持った皿に水をつぐのはあぶない）

こすって鋭くすれば長くたもつべからず、（かみそりの刃はかけやすい）

金玉堂に満つるもよくこれを守ることなし。（宝のつまった家はあぶない）

富貴（ふうき）にしておごれば、おのずからそのとがをのこさん。（位が高く金持ちでいばると、じぶんで罪をつくる）

功なり、名とげて、その身しりぞくは天の道なるかな。

〔訳者註〕

よくばるよりも、手に入ったものを失うな。

第十章 管魂抱一

管魄（えいこん）をいただき一をいただきよく離ることなからんか、（管魄は頭脳。抱一は最小数の一つの道を守る）

気をもっぱらにし、柔（じゅう）を致し、よく嬰兒のごとくなからんか、（柔を致すは、やわら

かに行動する)

滌除玄覽(てきじょげんらん)してよく疵(きず)なからんか、(滌除は、よく洗い濯ぐ。玄覽は、よく見る)

民を愛し、国をおさむるによく無為ならんか、

天門開闔(かいこう)してよく雌(し)たらんか、(天門開闔は心が動く、雌は消極的)

明白四達して、よく無知たらんか、(明白四達は至るところの万事万物。無知は無為でまどわな
い)

これを生じ、これをたくわう、生ずるも有せず、(生産、貯蔵しても私有はしない)

なしてたのまず、長ずるも幸(さい)せず、(はたらきの報いを期待せず、大きくなっても支配者にはならない)

これを玄德という。(玄德は最高の徳)(五十一章参照)

〔訳者註〕

上の六句は、：乎(か)をもって完全な徳、名達又は玄の意味する妙域を把持する諸条件を示す。冒頭の「戴」の字は前章の最後の「哉」の字が、筆記の誤りで「戴」になつてここに重出したらしいとの一説あり。

第十一章 三十幅

三十幅(ぶく)は一轂(こく)を共にす、(幅は車の矢スポーク。轂は心棒の穴)
その無なるにあたって車の用あり、(用は役にたつ働き)

埴(はに)をねやして以て器(うつわ)をなす、(粘土をこねて、いれものを作る)

その無なるにあたって器の用あり、(中が空だから役に立つ)戸にまどをうがって以て室となす。

その無なるに当たって室の用あり、(窓があいているから室が役に立つ)
故に有の利たるは無の以て用をなせばばり、(無がはたらくからである)

〔訳者註〕

有と無は宇宙の中で相対的に関連しているものである。

第十二章 五色令人目盲

五色(美しい色彩)は人の目を盲(もう)ならしめ、(めくらにさせる)

五音(音楽の音)は人の耳を聾(ろう)ならしめ、

五味(美食の味)は人の口を爽(そう)ならしめ、(まちがえさせる)

馳騁田獵（ちていでんりょう、馬で走り、狩猟をする）は人の心をして発狂せしめ、得がたきのたからは人の行いをしてそこなわしむ。これを以て聖人は腹をなして、目をなさず。（内面の修養をするが外に心をとられない）故に彼を去り此れを取るなり。

〔訳者註〕

感傷（パトス）をすて、理法（ロゴス）を取るのが老子の勧告である。彼は色、味、音を、此は道を指す。

第十三章 寵辱若驚

寵（ちよう）は辱（じよく）なり、（めぐみははずかしめであるのは）驚くがごとし、貴は大患（大病）なり、身のごとし（位が高くなるのは自分の身の病気のようなものだ）何をか寵は辱なりという（？）寵は上たり辱は下たるも、

これを得るにも驚くがごとく、これを失うにも驚くがごとし。これを寵辱は驚くがごとしという。何をか貴は大患なり身のごとしという？

われに大患あるゆえん（わけ）のものは

わが身を有するためなり、われは身なきに及んでわれは何のうれいかあらん。

故にたつとぶには身をもってし、天下をおさむる者にはすなわち以て天下を寄すべし。（世界を寄託せよ）

天下を愛するには身を以てして、天下をおさむる者にはすなわち以て天下を託すべし。

〔訳者註〕

もし世界のために自己を棄てる人があれば必ずや献身的で愛他的であるにちがいない。そしてもし自分の高い地位を無視して自分を尊敬すれば名誉と恥辱は誰をも奴隷にすることはできない。日本の殺された同志幸徳伝次郎は辞世の詩の中で、「死生は長夜の夢、栄辱は大虚の塵」と歌った。

第十四章 視之不見

これを見れども見ず、名づけて夷（い）という。（夷は無色無形）これをきけども聞こえず、名づけて希（き）という。（希は無声）これをとらえんとするも得ず、名づけて微（い）という。（微は極小）

この三つのものは以て致詰（ちきつ）すべからず、（致詰は推理する）故に混じて一となす。

その上（かみ）はあきらかならず、（その上は古代）その下（しも）はくらからず、（その下は現代）

繩々（じょうじょう）として名づくべからずして（繩々兮は無限に長く）

無限に復帰す（物質でない「無」）

これを無状の状、無象の象（形状もすがたもないすがた）、

これを惚恍（こつこう）という（あいまいな、有るか無いかの）、これをむかうると、その首を見ず、これにしたがうも、そのうしろを見ず。

いにしえの道をとりにて以て今の有を御（ぎよ）し（今の有は現在の事実。御しはみちびく）よく古始を知る。

これを道紀（道の太いつな）という。

〔訳者註〕

始めの三行にある夷、希、微の三字は中国音でイ、ヘ、ウェイとよむので、西洋人は「イヘウェイ」の音は「エホヴァ」、キリスト教の天帝の名からこの合言葉を老子がここにかくして入れたものとの意見あれど、ユダヤ教のカツブラ宗と老子の生地が関係ある如き説は疑問にして、これは道の特性の形容にすぎまい。

第十五章 古之善爲士

いにしえの善く士たる者は微妙玄通（練達）、深くしてしるべからず、それただ識るべからず。故に、しいてこれが容をなさば（形容すれば）豫けいとして冬に川を渉るがごとく（ぐずぐずして、ためらいつつ）

猶（ゆう）けいとして（遠慮して）四鄰を畏れるがごとく、儼（げん）けい（謹んで）としてそれ客たるがごとく、

渙（かん）けいとして（慎重に）氷のまさとけんとするが如く、敦（とん）けいとして（粗野に）樸（丸太の荒木）のごとく、

曠（こう）けい（広々）として谷のごとく、渾（こん）けいとして（はっきりせず）それにござるがごとし。

いづれかよく濁りて以てこれを静かにしておもむろに清からん。

いづれかよく安んじて以て動きて、これをおもむろに生ぜん。

〔訳者註〕

理想的の有徳者は常に謙遜で控え目である。そして完くでしゃばることはなく、自己を主張しないことこの本文の如し。道は古来永久不変である。